The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

五悪段は中国撰述か

能仁正顕

一　問題の所在

五悪段は、現存する〈無量寿経〉の中、『大阿弥陀経』（伝支謙訳）、『平等覚経』（伝支婁迦讖訳）、仏陀跋陀羅・宝雲訳『無量寿経』（伝康僧鎧訳）の漢訳三本にのみ説かれ、唐訳、宋訳、および梵本、チベット訳本には説かれていない。その成立に関して、『無量寿経』の五悪段は中国撰述で動かないであろう。二世紀から三世紀にかけて漢訳された『大阿弥陀経』と『平等覚経』という古訳に属する初期〈無量寿経〉については、インド撰述説も唱えられてきたが、学界の動勢は中国撰述説を軸に展開してきたように思われる。

まず研究史を概観しておこう。中国撰述説は、荻原［一九三八］[1]が道教の道徳的訓戒に常用される語句の散在を指摘して漢人の疑作説を唱えたことにはじまる。その説は望月［一九四六］[2]や藤田［一九七〇］[3]などに受け継がれ補強されてきた。一方、池本［一九五八］[4]、薗田［一九六〇］[5]、あるいは色井［一九七六］[6]などにより、五悪段は経典全体の教説構造の上で不可欠なものと位置づけられインド撰述説が提唱された。そのような研究情況について、末木［一九八〇］[7]では、いずれの説にしても断定できる強い根拠はないと判じられた。その後、梶山［一九八三］[8]は異民族の侵入支配により混乱した当時の北インドの社会情況、すなわち『マハーバーラタ』に伝わる「カリ・ユガ」や『転輪聖王獅子吼経』の「刀杖の劫」に五悪の根拠を求め、あるいは林［一九八六］[9]はゾロアスター教に求め、インドの歴史・文化という新たな視点からインド撰述説を支持した。中国撰述説の立場からは、丘山［一九九二］[10]により中国の時代思潮を視座とした考察がなされる。

藤田［二〇〇七］[11]は浄土教思想に関する最新の研究成果であるが、その中で従来の五悪段の研究を総括し「廃悪修善の思想や北インドの社会情況の中に、その必然的根拠を求めようとするのは決して十分なものではなく支持することはでき

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ない」という。これは先の薗田説や梶山説を念頭に置いたものである。また新写本の出土情況をふまえ、「アフガニスタンの新出〈無量寿経〉のサンスクリット写本は、ちょうど三毒・五悪段に先立つ部分からの断簡であるが、三毒・五悪段に相当する文は認められないから、この一段がサンスクリット本に存在しなかったことは、六―七世紀にさかのぼって証明されたわけである」と、結論づけている。

現実には現梵本に五悪段を欠くという事実が中国撰述説に優位にはたらき、インド撰述説が文献学的考証にもとづく十分な根拠を提示しえないできた点で、五悪段の成立問題は相対的に中国撰述説へと傾斜していったように思われる。絶対的な根拠、すなわち二、三世紀の写本が発見されれば決着はつくが、現状でインド撰述説が成立するためには、インドの時代思潮や〈無量寿経〉の原初形態など、五悪段の原本にかかわる何らかの文献学的根拠が示されなければ、議論の進展は望めないであろう。

前置きが長くなったが、本論では、『大阿弥陀経』の五悪段の根本教説が「五悪中への釈迦牟尼仏の出世と説法」にあると考え、「五悪は五濁と同一概念なのか」、および「なぜ五悪段は消えたのか」ということを論点として設定し、その教説が梵本〈阿弥陀経〉の「五濁中への釈迦牟尼仏の出世と説法」の一節と共通する伝承であることを明らかにする。それによって、『大阿弥陀経』の五悪段がインド起源であることを提唱するものである。

さて五悪段の根本教説に対応する、梵本〈阿弥陀経〉の一節は以下の通りである。

tan mamāpi śāriputra paramaduṣkaraṃ yan mayā sahāyāṃ lokadhātāv anuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisaṃbudhya sarvalokavipratyayanīyo dharmo deśitaḥ sattvakaṣāye dṛṣṭikaṣāye kleśakaṣāya āyuṣkaṣāye kalpakaṣāye // (*Smaller Sukhāvatīvyūha*, Fujita ed., 94.4–8 (§19))

わたしが娑婆世界における衆生濁・見濁・煩悩濁・命濁・劫濁の中で無上菩提を悟り、すべての世間に信じ難い法を説くというのは、わたしにとっても極めてなし難い事であった。

二　五悪は五濁と同一概念なのか

五悪段の根本教説　『大阿弥陀経』の五悪段では、第一悪を説き始める冒頭部分に、釈迦牟尼仏が五悪の中に出世して衆生に説法したことが説かれる。

今我於是世間作佛。爲於五悪五痛五燒之中作佛、爲最劇教語人民。令縱捨五悪、令去五痛、令去五燒之中。降化其心、令持五善、得其福德度世長壽泥洹之道。（大正一二　No三六二、三一三c）

今、わたしはこの世で仏となった。五悪五痛五燒の中で仏となり、世の人々に教え語るというのはきびしく困難なことであった。五悪を捨てさせ五痛を去り五燒の中より去らしめる。悪心を抑えて教化し、五善をたもたしめ、その福德をもって俗世を渡り、長寿へ、そして涅槃への道を得させたのである。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

五悪とは正確には、「五悪・五痛・五焼」という表現の一部である。この記述に続いて第一悪から順次、五つの悪の一々の内容が詳説され、悪行を止めて善行をなし、世間の、そして出世間の利益を求めるよう勧められる。その前後の「五悪段」（三一三b26―三一六b22）と呼ばれる一段の根本の教説として位置づけられるのが、「釈迦牟尼仏の出世と説法」を説くこの記述である。しかもこの一節がその後二度繰り返されて説かれる点は、五悪段生成の母体が「釈迦牟尼仏の出世と説法」であることを物語っているように思われる。

この傍線部の記述が先に引用した〈阿弥陀経〉の一節に酷似していることは一見して明かであろう。

ではその『大阿弥陀経』の記述は〈阿弥陀経〉の伝承と共通するものなのであろうか。まずここでは「五悪」と「五濁」(pañca-kaṣāya) の概念が同一か否かの問題を検討することから始めよう。

『無量寿経』の五悪と五濁　これまで『無量寿経』の「五悪」と「五濁」の異同が問題にされることはなかった。『無量寿経』にはその二語が出てくるため、両者が別概念と考えられたからだと思われる。五悪について、吉蔵の『無量寿経義疏』に「五悪とは、一に殺、二に盗、三に邪婬、四に妄語、五に飲酒なり。五戒の善を損なうが故に悪と名づくる也」（大正三七No一七四六、一二四a）と説かれるように、五悪は伝統的に五善の内容となる五戒の対立概念として解釈されてきた。慧遠も同様である（大正三七　No一七四五、一一四a）。しかし、『無量寿経』の五悪段は、それ以前の『大阿弥陀経』や『平等覚経』に説かれていた五悪段にもとづいて中国で編集されたもの、という新知見が近代の文献学を基礎とした研究によってもたらされた。すなわち、『無量寿経』の「五悪」は既存の漢訳本に由来する用語ということである。一方、「五濁」は対応する梵本からの翻訳語と考えられることから、両訳語の成り立ちは異なっていると言わねばならない。表現の違いを直ちに概念の違いに結びつけることはできないのである。

五戒との対応で五悪を解釈する説は、仏教辞典に掲載されるほど今日では定説化しているが、[12] 以上の理由から本来「五悪」が「五濁」であった可能性を検討する余地は残されている。

五濁という語　まず「濁」の語義について見てみよう。対応する梵語 kaṣāya (Pāli : kasāya, kasāva) は、語根 √kaṣ（引っ掻く、傷つける）に由来し、律蔵では草木の引っかき傷からにじみ出た樹液や煎じ汁、またその味の渋みや色の濁りの意味で用いられる。阿含・ニカーヤでは心の「にごり」に転じて貪・瞋・癡をはじめとした悪を象徴する煩悩の同義語として用いられる。玉の〝にごり〟や〝きず〟、転じて〝つみ〟を意味する「瑕」という語も使われるが、その漢字はよくその思想上の意味を

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

あらわしている。

特に北伝アビダルマでは、「濁」とは貪欲であり貪欲によって生じた身口意の業であるという解釈が行われ、また「濁」によって地獄に生まれることを説く阿含経が存在したことも知られる。[13] 煩悩・業・苦と連鎖する迷いの因果の中で、衆生が「濁」という貪欲の業に縛られて、苦の享受を避けられない輪廻的生存であることが示される。そのような思想的意味づけが「濁」の語に対してなされている。

ここで古訳時代の経典における五濁の用例を幾つかあげておこう。

（1）支謙訳『太子瑞応本起経』：汝精進勇猛後得佛時、當於五濁之世度諸天人、不以爲難。必如我也。（大正三　No一八五、四七三a）

（2）支謙訳『維摩詰経』：下方去此度如四十二江河沙刹、得忍世界、有佛名釋迦文。漢言能仁如來至眞等正覺。於五濁刹（pañcakaṣāye buddhakṣetre）以法解説懈廢之人。（大正一四No四七四、五三二b）

（3）竺法護訳『正法華経』：今吾興出於五濁世、一曰塵勞（kleśa-）、二曰凶暴（sattva-）、三曰邪見（dṛṣṭi-）、四曰壽命短（āyuṣ-）、五曰劫（kalpa-）穢濁。爲此之黨本、德淺薄慳貪多垢故、以善權現三乘教。（大正九　No二六三、六九c）

五濁の語は仏伝類や大乗経典に頻出し、世間の観念と結びつき、しばしば仏の出世・不出世にかかわる文脈で用いられる。アビダルマ文献でも、五濁は釈迦牟尼仏の出世を註釈する場面で説かれる。

では五濁とは具体的にどのように概念規定されるのであろうか。そもそも五濁を説く経典は多いが、五つの各名称を示すものは少ない。『正法華経』のように五濁の各名称は示されても、その内容を説明するものはさらに少ないのである。

漢訳本しか伝わらないが、竺法護訳『持人菩薩経』（大正一四　No四八一、六二七c）には五濁の内容説明が示されている。すなわち、①人は多くが悪をなし物事の道理をわきまえない（人多弊悪不識義理）、②疑わしく邪な思想が盛んになり正法を信じない（六十二疑邪見強盛不受道教）、③愛欲煩悩が盛んで自身の行方を知らない（人多愛欲塵勞興隆不知去就）、④短命である（人壽命短、往古世時八萬四千歳……）、⑤時代が移り三つの災害が起こる（小劫轉盡三災當起……）、と五濁のそれぞれを示している。ほぼ共通の内容が梵本『菩薩地』（*Bodhisattvabhūmi*）にも説かれている。

また『入法界品』（*Gaṇḍavyūha*, Vaidya ed., 250.1–）では、五濁と十不善業道（daśākuśala-karmapatha）が密接に関係して説かれる。五濁の世では十善業道はなく、ほとんどの衆生が十不善業道を行い悪趣に堕ちていく。また十不善業道を行うことによって、短命になり、天は雨を降らさず飢饉がおこり、社会が混乱するが、その時、民衆の悲痛な声に大悲をおこす者が現れるという。我々は、これらインド撰述文献によって、五

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

濁がインドにおいてどのように捉えられていたのかを知ることができるのである。

『大阿弥陀経』の五悪も先に引用した記述から知られるように、仏の出世に結びついたもので、五濁の用法と共通している。

五悪と五濁の対応　さて五悪段の分析を始めるにあたり、各五悪の記述について、①「佛言。其××悪者……」に始まる五悪の導入文、②「……是爲××大悪。爲××痛。爲××燒」に至るまでの五悪の解説文、③「勤苦如是。……是爲××大善」という勤苦をもたらす五悪を抑止し涅槃に到る五善を勧める定型文、の三部分に分け、その構造に当てはめて、五悪が何であり、どのような内容として説かれているのかを整理・分析しよう。五悪は基本的に煩悩にもとづく人間の罪悪・不善の営みを語るもので、相互に内容の重複がある。何が五濁であり、どの部分で五濁を判断するか、その基準を明確にするためである。その際、梵本『菩薩地』に示される五濁の概念規定を参考にする（Wogihara ed., 252.15–253.12）。

まず顕著に特徴が出ている第三悪の検討から始めよう。長くなるが第三悪の記述の全文をあげる。

①佛言。其三悪者、諸世間人民、寄生相因、共依居天地之間。處年壽命、無能幾歳。

②至有豪貴・長者・賢明・善人、下有貧賤・尪羸・愚者。中有不良之人。但懷念毒悪、身心不正、常念淫泆、煩滿胸中。愛欲交錯、坐起不安。貪意慳惜、欲横唐得。眄睞細色、悪態姪泆。有婦厭憎、私妄出入。持家所有、相給爲非。聚會飲食、專共作悪。興兵作賊、攻城格鬪、劫殺截斷強奪不道。取人財物、偸竊趣得、不肯治生。所當求者、不肯爲之。悪心在外不能專作。欲繫成事、恐勢迫脅、持歸給家、共相生活。恣心快意、極行作樂。行亂他人婦女、或於其親屬、不避尊卑・長老、衆共憎悪、家室・中外患而恚之。亦復不畏縣官法令。無所避録。如是之悪、自然牢獄。日月照識、神明記取、諸神攝録。故有自然泥犁・禽獸・薜荔・蜎飛蠕動之屬。展轉其中、世世累劫無有出期、難得解脱。痛不可言。是爲三大悪、爲三痛、爲三燒。

③勤苦如是。比若火起燒人身。人能自於其中、一心制意端身正行、獨作諸善、不爲衆悪者、身獨度脱得其福德、可得長壽・度世・上天・泥洹之道。是爲三大善。（大正一二、三一四b）

第三悪の導入文①では、互いに寄り合い依存して生活している世間の人にとって、この世にいる年数は幾ばくもなく「短命」であるという。『菩薩地』は命濁について、「今の時、人間の寿命は短い。長く生きる者で百年である」（etarhy alpaṃ jīvitaṃ manuṣyāṇāṃ yaś ciraṃ jīvati sa varṣaśataṃ）と規定するように、命濁の特徴は短命の一言に尽きる。傍線部の第三悪の記述は明らかに命濁の特徴を示している。

第三悪の解説文②では、短命な彼らには、善人もいるが不良の人がいて、常に淫欲の煩悩で胸をいっぱいにして、殺戮

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

や強奪といった悪事をはたらく。そのような悪を日月は照らし見て神は記録し、「自然」に地獄・餓鬼・畜生の三悪道があるという、道教や民間信仰といった中国文化の影響をうかがわせる表現をもって自業自得の業報輪廻を解き明かす。五戒の善には「邪婬」の悪が対応する。

そのような輪廻の生存からいつ抜け出せるか時期も分からぬまま、筆舌に尽くしがたい苦痛を受け続けなければならないからこそ、③では、火に身を焼かれるような苦しみの中にあって、自ら身心をととのえて悪行を抑止し、福徳をはじめ、長寿、涅槃を得るにいたる、善行をなすべきことが勧められる。また「度世」や「上天」の表現にも中国文化の影響が指摘される。

以上のように、第三悪は命濁を展開させたものである。命濁における人間の退廃と輪廻転生により生じる苦について、中国文化にもとづく文飾が施され説明的に語られて、そこから脱するべく、善行を為すべきことが示されるのである。

以下、五悪の記述を各すべてあげることはできないので、順次、①に相当する部分のみ原文をあげ、各悪が何を説いているのかを検討しよう。

第一悪については次のようである。

①佛言。其一悪者、諸天・人民、下至二禽獸・蜎飛蠕動之屬一、欲レ爲二衆悪一。強者服レ弱、轉相剋賊、自相殺傷、更相食噉。不レ知二作善一。

生きとし生けるものは、強者が弱者を征服して殺しあう。殺生は世間的な道徳観念としても諸悪の根本である。しかし、彼らは何が善で何が悪なのかも知らず悪事をはたらくという。悪事をはたらけば罰を受けるというのは、因果の必然であり、業報の道理である。その点で第一悪は、『菩薩地』が正法の破壊・消滅と像法の出現とした、「見濁」を表現したものと解釈することができる。五戒の善には「殺生」の悪がそのまま対応する。また「道之自然」「神明記識」などの中国的表現をもって業報輪廻の思想が語られるのは、第三悪と同様である。

第二悪については以下のようである。

①佛言。其二悪者、世間帝王・長吏・人民・父子・兄弟・家室・夫婦略無二義理一、不レ従二正令一。奢婬憍慢、各欲レ快レ意、恣レ心自在、更相欺調、殊不レ懼レ死。

その導入文①では、帝王、官吏、人民や父子・兄弟・夫婦といった家族が人間関係の道理をわきまえず、仏法に従わず、贅沢が度を過ぎ、心地よさを求めてわがまま勝手になり、相手を騙し、死後のことをも懼れることがないという。『菩薩地』は「衆生濁」について、母たることを識らない（amātṛjñā）、父たることを識らない（apitṛjñā）、為すべきことを為さない（na kṛtyakarāḥ）、今世にも来世にも罪において畏れを見ない（na

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ihaloke na paraloke avadye bhāyadarśinaḥ）など、衆生の不徳をあげる。第二悪にはそれらとの共通項が多く見られることから、「衆生濁」を表現したものと解釈することができる。第二悪の解説文②の部分において、五戒の善に対応する「偸盗」の悪が説かれる。

次に、第四悪について以下のように説いている。

①佛言。其四悪者、諸人不レ能二作善一、自相壞敗。轉相教令、共作二衆悪一。主爲二傳言一、但欲二兩舌・悪口・罵詈・妄語一、相嫉更相鬪亂。

その導入文①では、人は善を壊し他者をそそのかし一緒になって悪事をはたらく。下線部中の両舌、悪口、妄語は十悪の項目に相当する。『菩薩地』は「煩悩濁」について、情欲（rāga）や貪り（lobha）といった貪欲煩悩のほか、論争（vigraha）、口論（vivāda）、諂い（śāṭhya 諂）、騙し（vaṃcana 誑）、正直でなく（nikṛti 詐僞）、嘘をつく（mṛṣāvāda 妄語）など、口業にかかわる不善の特徴をあげる。第四悪との共通項が多く、第四悪は「煩悩濁」を表現したものと解釈することができる。五戒の善には「両舌悪口妄言」の悪がそのまま対応する。

最後に、第五悪について以下のように説いている。

①佛言。其五悪者、世人徒倚懈惰、不二肯作善一、不レ念二治生一。妻子飢寒、父母俱然。欲三呵教二其子一、其子悪心、瞋レ目應怒、言令不レ從。

その導入文①では、飢えや寒さが懈怠に起因し、親が子を諭すことが逆に怨みを結ぶといった因果が示される。家庭環境に限定されたものであるが、「飢え」は劫濁の特徴の一つである。『菩薩地』では「劫濁」について、その時代に飢饉と疫病と戦争の三つが頻発することと概念規定される。第五悪の解説文②の部分について、五戒の善には「飲酒」の悪が対応する。また阿羅漢を殺しサンガを乱すなどの五逆罪を意業として犯すこと、輪廻や往生の教え、善悪因果の道理を信じないなども説かれる。

ところで、『大阿弥陀経』では三輩段の後、禅定や戒律の出家道に精進することができない者について、不殺生、不盗竊、不婬泆、不調欺、不飲酒、不両舌、不悪口、不妄言、不嫉妬、不貪餐といった十善の世間道やその他、不慳惜、不狐疑、孝順、信受仏経語、信作善後世得其福といった徳目があげられる。薗田［一九六〇］は、下輩段の十善と三毒・五悪段との有機的な関係を指摘するが、十善の説かれる背景には五濁の思想がある。五濁を前提として五悪を考えるとき、三輩段に続いて十善業道が往生の行法として説かれ、貪瞋癡の三毒から五悪へと展開する五悪段の構造が、無理なく一貫したものとして理解できる。漢訳者は、五濁と十善・十不善の教えが密接な関係にあることを踏まえた上で、大幅に手を加えているのである。その範囲は五悪段・三毒段にとどまらず、三輩段にまで及んでいる可能性が大きい。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

三　小結

以上の考察から、「釈迦牟尼仏の出世と説法」に続く、五悪の記述が、順次、見濁・衆生濁・命濁・煩悩濁・劫濁を表したもので、「五悪」という漢訳語が、「五痛・五燒」を含めて、我々に「五濁」として知られる梵語 pañca-kaṣāya と同一概念であることが明らかになった。したがって、五悪段における五悪の記述はインド起源の五濁に由来する記述であると結論づけることができる。

ただし五悪が五濁でありインド撰述文献に源泉があるとしても、それでもなお五濁を熟知する訳者が漢訳に際して付加した可能性は否定できない。内容や表現形式から判断すれば、『大阿弥陀経』の五悪段は五濁に対する漢訳者による主体的な解釈と中国的表現の技巧によって成立したものと考えるのが妥当であろう。しかし、〈無量寿経〉が〈阿弥陀経〉と同じ〈スカーヴァティー・ヴューハ〉というインド語の経名をもち、しかも『大阿弥陀経』の五悪段中の「釈迦牟尼仏の出世と説法」の記述が梵本〈阿弥陀経〉の伝承と一致するという事実は、五悪段がインド起源であることの証左といえよう。

なお支謙について「世務を交えず、竺法蘭道人に従って更に五戒を錬った」という伝記があり、五悪段の中国撰述説の一つの根拠として指摘される。[14]『大阿弥陀経』の訳者に関しては、現在、支婁迦讖説、支謙説、支婁迦讖訳・支謙改訳増補説の三説がある。五濁を説く経典の翻訳は支謙に多く見られ、支謙はその当時の五濁の思想についても熟知していたと思われる。[15]一方、管見では支婁迦讖訳に五濁は見られないようである。五悪段において五濁のもつ意味を考慮すると、支謙こそふさわしく、伝承を否定して支婁迦讖を支持する積極的な根拠は五悪段に限っては見当たらない。

四　なぜ五悪段は消えたのか

では『大阿弥陀経』の五悪段、すなわち「五悪＝五濁中への釈迦牟尼仏の出世と説法」の記述が梵本〈無量寿経〉で消えたのはなぜであろうか。またいつ消えたのであろうか。

まず釈迦牟尼仏が五濁中に出世したことについて、梵本〈無量寿経〉には次のような記述がある。

sthāpayitvā tathārūpeṣu kalpasaṃkṣobheṣu ye pūrvasthānapraṇihitāḥ pañcasu kaṣāyeṣu vartamāneṣu yadā buddhānāṃ bhagavatāṃ loke prādurbhāvo bhavati tad yathāpi nāma mamaitarhi // (*Larger Sukhāvatīvyūha*, Fujita ed., 59.23–60.2（§ 36））

但し、譬えばわたしが今［五濁中に出世した］ように、諸仏世尊が出世するときには五濁が起こっているのであるが、そのような時代が濁乱しているところに［生まれよう］と過去に誓願を立てた［菩薩］を除いて、のことである。

同様に『無量寿経』（除生他方五濁悪世。示現同彼如我國也）、

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

唐訳（唯除五濁刹中出現於世）、およびチベット訳本にも、この記述は見られるが、『大阿弥陀経』『平等覚経』にはない。宋訳にもないが同経には五悪段自体が説かれていない。結論を言えば、初期〈無量寿経〉の五悪段は、この五濁悪世への出世を願う菩薩の記述に収斂して伝承されるようになったと考えられる。

引用した上記の記述は、阿弥陀仏の本願が成就したことにより、常に見仏・聞法し、菩提を得るに至るまで悪道に堕ちず、前世の記憶を失わないという、諸功徳が極楽世界に往生した菩薩に実現されることを説く前文に続き、「除いて sthāpayitvā」の語によって付言された、菩薩に関する但書きである。内容は、菩薩道を完成するための諸条件が整えられた極楽世界に往生したにもかかわらず、そのような功徳の享受を留保して、五濁という劣悪な環境の中に衆生を済度する菩薩行の場を求め願生することを意味する。この点は後で述べよう。

ではなぜ「釈迦牟尼仏の出世と説法」の記述が〈無量寿経〉からは消えて〈阿弥陀経〉には残ったのか。両経の菩薩思想の展開についての私見を述べて、その問いについての答えとしたい。

〈阿弥陀経〉の菩薩　極楽世界の菩薩は基本的にすべて「不退転」の菩薩とされるが、〈阿弥陀経〉によれば、さらに彼らは「一生補処」あるいは「一生所繋」（ekajāti-pratibaddha）という概念によって意味づけられる。原義は「一生だけ迷いの世界に繋がれているもの」を意味し、数限りなく繰り返した生死輪廻の中で善行を積み重ねてついに上求菩提の究極に達し、次の生涯には無上菩提を得て仏となり涅槃に至ることが決定した、菩薩道における最高位の菩薩のことを言う。仏伝では、この世に誕生して仏となる直前の、兜率天上の釈迦菩薩を指し（『太子瑞応本起経』）、あるいは釈迦牟尼に次いで仏となる兜率天上の弥勒菩薩を意味した。

阿弥陀仏と極楽世界の讃歎を説く〈阿弥陀経〉において、釈迦牟尼仏を讃歎する「釈迦牟尼仏の出世と説法」の記述をどのように位置づけるのかは問題である。しかし、その出世と説法の記述自体は決して特殊なものではなく、仏伝や『維摩詰経』などの大乗経典とも共通した、きわめて一般的な定型的表現というべきものであった。素直に読めば、釈迦牟尼仏の讃仰の上に阿弥陀仏信仰が成り立つことを語るものと理解できる。そのような釈迦牟尼仏を讃仰する「釈迦牟尼仏の出世と説法」の一文が呼び水になって、釈迦菩薩や弥勒菩薩の出世をイメージさせる一生補処の概念が〈阿弥陀経〉に導入されたのではなかろうか。

〈無量寿経〉の菩薩　一方〈無量寿経〉で一生補処の概念が導入されるのは、『平等覚経』第二十願においてである（訳

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

語は「一生等」）。『大阿弥陀経』には説かれない。その場合〈阿弥陀経〉と異なるのは、一生補処の菩薩が、衆生済度のため「個別のすぐれた誓願（praṇidhānaviśeṣa）を立てた菩薩」、すなわち普賢行の菩薩とペアになって説かれる点である。後者の菩薩は、宇野［一九九〇］[16]によって『十地経』第六現前地に説かれる空・無相・無願中の無願解脱門との関係が指摘されるように、大悲の故に、一生補処を留保し、弘誓の鎧を身にまとい苦悩する衆生のため何処であれ何度でも輪廻世界に生まれることを願う菩薩である。

先の五濁への出世を願う菩薩は、この特別の誓願を立てた菩薩に準じた菩薩であり、彼らはともに「唯除」（sthāpayitvā）の語によって付言された菩薩である。梵本には sthāpayitvā の用例が計七例あり、この語によって〈無量寿経〉の菩薩思想の展開を跡づけることができると考えるが、今は本論と関係の深い三例を取りあげよう。

sthāpayitvā の表示対象	『平等覚経』	『無量寿経』	梵本
①特別の誓願を立てた菩薩	第20願	第22願	第21願
②獅子吼する菩薩	×	○	§33
③五濁への出世を願う菩薩	×	○	§36

『平等覚経』第二十願に初出の、一生補処とペアで説かれる「特別の誓願を立てた菩薩」は、梵本第二十一願をはじめ、後期〈無量寿経〉の本願に継承される。その梵本の本願成就文には「獅子吼する菩薩」として説かれるが、『平等覚経』ではその成就文自体がない。「五濁への出世を願う菩薩」も『平等覚経』には説かれない。

大乗の根本精神を発現した菩薩として、「特別の誓願を立てた菩薩」が一生補処の菩薩から別立てされたように、この五濁への出世を願う菩薩は「五悪＝五濁中への釈迦牟尼仏の出世と説法」の記述が根拠となって発生したのではないかと考える。〈阿弥陀経〉において出世した釈迦牟尼仏が讃歎されるのは、五濁の中で説法をし衆生済度の利他行を成し遂げたからである。釈迦牟尼は五濁悪世の衆生に極楽世界に生まれるよう誓願することを教えた。そのような釈迦牟尼仏の利他行を菩薩行の理想とし、自ら菩薩の自覚をもって誓願する菩薩の観念が発生したところに、「五悪＝五濁中への釈迦牟尼仏の出世と説法」を語る記述が発展的に消滅した理由があると考える。

五　まとめ

五濁を説く仏教文献のインドでの流伝情況から判断して、すでに指摘されるように、混乱した北西インドの社会情況を五濁は反映しているのであろう。そのような現実社会の中で、仏教に求められたことは民衆を済度する正法が説かれることであった。〈無量寿経〉は、阿弥陀仏の極楽世界に依拠した

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

菩薩道の体系を展開させる中で、大乗の根本精神があらわれた、衆生済度の願いに目ざめた菩薩を生み出していった。その根拠になったのが、釈迦牟尼は五濁という厳しい環境の中で仏となり世の人々に教えを説き導くという難事を成し遂げた、という伝承であったと位置づけられよう。

『大阿弥陀経』の原本に説かれていたと考えられる、その「釈迦牟尼仏の出世と説法」および「五濁」の記述は、おそらく『平等覚経』にも存在したであろう。その漢訳された五悪段の大部分は訳者によって加筆されたものとはいえ、五濁中に生きる人間を洞察した深い宗教性と日常誰にでもそうした悪が起こりうる危うさが見事に語られているために、中国社会への流伝に当たって、訳者は若干の語句の修正にとどめ『大阿弥陀経』の訳文を踏襲したのではないかと推測する。

1 『荻原雲来文集』二三五頁、荻原博士記会会。 2 望月信亨『仏教経典成立史論』三九八～四〇〇頁、法蔵館。 3 藤田宏達『原始浄土思想の研究』一九四～二〇五頁、岩波書店。 4 池本重臣『大無量寿経の教理史的研究』一八〇～二〇九頁、永田文昌堂。 5 薗田香勲『無量寿経諸異本の研究』二二六～二五六頁、永田文昌堂。 6 色井秀譲「大阿弥陀経疑点若干」(『印度学仏教学研究』二四―二)。 7 末木文美士「『大阿弥陀経』をめぐって」(『印度学仏教学研究』二九―一)。 8 梶山雄一『「さとり」と「廻向」―大乗仏教の成立』一一二～一二〇頁、講談社。 9 林和彦「『大阿弥陀経』にあらわれた光明の性格と北西インド」(『仏教芸術』一六五)。 10 丘山新「『大阿弥陀経』の思想史的意義」(『東洋文化』七〇)。なお大田利生「五悪段の研究」(『教学研究所紀要』五、一九九七年)にはそうした研究史が整理されている。 11 藤田宏達『浄土三部経の研究』九五～九九頁、岩波書店。 12 望月『仏教大辞典』の「五悪」および「五戒」の項を参照。五悪に対し、在家男女の受持すべき制戒として、不殺生、不偸盗、不邪婬、不両舌悪口妄言綺語、不飲酒の五つを挙げる。潅頂経や四天王経に出るというが、第四に「不両舌悪口妄言綺語」を挙げるのは特殊な説であり、それが十悪の説より転じたものと指摘される点は、五濁との関係でその成り立ちを考える場合に重要な示唆を与えてくれる。 13 『倶舎論』分別業品、および分別世品。 14 『出三蔵記集』巻十三、大正五五、№二一四五、九七c。藤田「一九七〇」五二～五三頁参照。 15 静谷正雄『初期大乗仏教の成立過程』一四八頁、百華苑。 16 宇野恵教「普賢行としての還相廻向」(『宗学院論集』六二)。

〈キーワード〉『大阿弥陀経』、五悪段、五濁、中国撰述、インド撰述、阿弥陀経

(龍谷大学教授)

NII-Electronic Library Service